【2017年10月1日発行】
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター37号
http://jsics.org/

日本国際文化学会事務局
多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
email: jsics@gr.tama.ac.jp

第16回全国大会（宮崎公立大学開催）報告と御礼

第16回全国大会実行委員長　倉 真一
（宮崎公立大学人文学部国際文化学科）

2017年７月８日～9日に宮崎公立大学キャンパスにおいて、日本国際文化学会の全国大会を開催させていただきました。当日は日本全国および海外から約100名の参加者を得て、盛会のうちに大会を終えることができました。また7日のエクスカーション「平和の塔見学ツアー」にも、当初の予想をこえる17名の参加がありました。

これも大会テーマの検討段階からご助言いただきました岩野会長はじめ理事会の皆様、心強い援軍であった安田事務局長と同スタッフの皆様、なにより学会員諸氏のご理解とご協力あってこそ。この場を借りて心より御礼申し上げます。

今大会では「＜２０２０年＞の越え方」をテーマに掲げさせていただきました。そのうえで1940年を起点とした総力戦体制の延長線上に現在と2020年を位置づけてみること（＝時代を跨ぐ）。中央―地方という枠組や国民国家の境界を越えていく人々の絆や実践に着目すること（＝地域を繋ぐ）、そこから総力戦体制の延長ではない2020年の越え方をインターカルチュラルに構想すること（＝文化を紡ぐ）、という視座を設定してみました。

こうした目論見が成功したか否かは、学会員の皆さんのご判断に委ねたいと思います。ただ大会を通じてあらためて実感したことがあります。それはこのようなテーマを投げかけることができたのは日本国際文化学会であればこそ、ということです。今日の半ば官僚制化した大規模学会、専門分化が著しい小規模学会にはない良さ―本学会が持つ「懐の深さと広さ」を、情報交換会の賑わいと参加者の皆さんの顔ぶれをみて再確認できました。

自由論題、共通論題、フォーラム、ICCOベストプレゼン賞発表においても、各報告に触発された活発な議論が展開されたこと、すべて

第16回全国大会テーマ：
「<2020年>の越え方――
時代を跨ぐ・地域を繋ぐ・文化を紡ぐ」
日時：2017年7月8日（土）/9日（日）
会場：宮崎公立大学

やわらかな知性を身につける。
宮崎公立大学
MMU LIBERAL ARTS

2018年度 第17回全国大会　多摩大学にて開催決定

事務局長　安田 震一
（多摩大学グローバルスタディーズ学部）

【2015年の全国大会】

基調講演
寺島実郎多摩大学学長
「国際文化交流としてのグローバリズム」

パネルディスカッション
「インバウンド・ツーリズムの可能性と課題」

【湘南キャンパス】
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
TEL：0466-82-4141（代表）
FAX：0466-82-5070

2015年度・第15回全国大会に続き、日本国際文化学会第17回全国大会開催校として、会員の皆様をお迎えできることを光栄に思います。

多摩大学グローバルスタディーズ学部は創立12年目を迎え、観光学を基盤としたホスピタリティ・マネジメントコースおよび英語教職課程、さらには一般教養を学ぶ国際教養コースがございます。基本的に少人数制、リベラルアーツ教育を軸にグローバル化を目標に掲げてきました。

2015年11月に藤沢市および藤沢市観光協会との三者協力連携より本学部の方針はローカルに根付き、グローバルに発信できることを目指すよう改革して参りました。新たに地元密着型学部として地元の課題、問題などに目を向け、そして将来は地域の問題を解決する学部として地域の発展、活性化に貢献できるように心掛けております。

そこで、第17回全国大会では、「ローカルからグローバル」を合わせた「グローカル」を中心テーマとして企画しております。2018年は第一次世界大戦が終結してから100年が経ち、その一世紀の間、日本と諸外国との関係を紐解き、その歩み、経験から将来を見据える必要があるでしょう。日本の立ち位置、2020年すなわち学会20周年を考慮し、全国大会のテーマを今後の国際化・グローバル化に関連する内容に設定して歴史研究から将来への手掛かりが得られるような全国大会になるよう努力いたします。

（1ページからの続き）

の報告者、司会者、フロアーの皆さんに感謝申し上げます。また開催校としてそうした場の提供をお手伝い出来たことを嬉しく思います。第1日目のシンポジウムでは、パネリストとした登壇されたルオフ先生、乗松先生、渡邊先生から、1940年に起源を持ちながら総力戦体制とその境界を越え出てゆく人々の諸実践をご報告いただきました。そこから国際文化学らしい「2020年の越え方」を構想するヒントが得られたのではないかと考えます。2日目のフォーラムでは、「諸外国における『インターカルチュラル』へのアプローチ」と題して、ディシプリンとしての国際文化学の展望、いわば「2020年の越え方」の議論が展開されたと思います。

『インターカルチュラル』第16号の大会特集では、シンポジウムでの議論を受けた論点整理と今後の課題、またフォーラムや自由論題、共通論題を含めた大会全体との係わりも含めて総括する予定です。来年の多摩大学、再来年の長崎大学そして2020年を越えてしっかりバトンを渡していけるよう、開催校として大会の反省と引継ぎを行ってまいります。

2017年度ICCO短期集中セミナーを沖縄・名桜大学で開催して

常任理事　菅野 敦志
（名桜大学国際学群）

セミナー終了後
の記念写真

2017年8月20日から27日にかけての1週間、ICCO（文化交流創成コーディネーター資格）短期集中セミナーが開催されました。

これまで2回は京都・龍谷大学で実施されていた本セミナーですが、3年目となる今年は、初の沖縄開催となりました。開催にあたっては、松居竜五ICCO資格制度運営事務局長と協力しながら準備を進めました。学生の移動手段の問題から、日程前半のフィールドワークは那覇市で、日程後半の作業および成果発表会は名護市・名桜大学（北部生涯学習推進センター）で実施しました。

全国の参加認定大学から集まった27名の参加者は、宿泊先の沖縄県青年会館に集合し、3名1組の班に分かれました。初日は、松居事務局長によるオリエンテーション、若林一平顧問によるフィールドワークと「出会い」に関する講演、加藤恵美資格審査委員から報告書執筆にかかわる説明がありました。2日目からはプロジェクトの相談・決定が進められ、上述のメンバーに加え、今年度の宮崎大会開催に尽力された倉真一常任理事も、学生に対して多くの有益なアドバイスを下さいました。

3日目から5日目まではフィールドワークを実施しましたが、沖縄ということもあり、当初の計画は多くが観光分野に偏りがちでした。しかし、松居事務局長からの提言を受けて、学生たちは最終的に、言語文化、音楽文化、色彩文化、服飾文化といった、多様かつ興味深いテーマに変更・選択していくことになりました。そうした際に、今年は学生アドバイザーとして、昨年の京都セミナーの参加者である名桜大学の馬場祐作さんが活躍してくれました。寝食を共にしながらアドバイスし、場を盛り立ててくれる馬場さんの存在によって、参加学生同士がいっそう打ち解けやすい雰囲気が作られたと思います。

途中、残念ながら1名の参加者は身内の不幸があり続行できなくなってしまいましたが、残る26名は、フィールドワークを日程通りこなし、5日目には名護に移動しました。

北部生涯学習推進センター
での発表準備

名護では、北部生涯学習推進センターで発表準備を行い、6日目に名桜大学講義棟にて発表会を実施しました。発表会では松居事務局長に加えて、審査委員会の岡眞理子委員長、斉藤理委員、山脇千賀子委員、大和裕美子委員が審査して下さいました。また、岩野雅子会長、小林文生顧問、馬場孝副会長からも応援とご支援をいただき、参加学生も大変心強かったと思います。

名桜大学で実施された発表会

結果的に、非常にレベルが高い充実した発表ばかりで、審査委員の先生方も甲乙つけがたい様子でした。終了後、懇親会会場へ移動しましたが、会場付近（名護市東江）の海岸で、学生たちが夕日を見ながらお互いの健闘をたたえあっていたのが印象的でした。最終的には報告書提出後の審査になりますが、苦しみながら生み出した学びの成果を見て、全員が資格を得るに値する頑張りであったと感じました。

本資格は単に学びの到達度を保証する資格ではなく、異なる文化がもたらすイノベーションとその構造を分析する力を保証する、創造性に満ちた資格であるといえます。取得の過程において、全国の大学教員が一致団結して教育にあたるという、そうした強みと魅力をそなえた本資格の制度構築と運営にご尽力いただいた関係委員・会員の皆様に心からのお礼を申し上げつつ、本資格と参加学生の双方が、将来のさらなる可能性に向けてますます飛躍を遂げてくれるであろうことをこの沖縄セミナーを通じて確信した次第です。

第17回　全国大会　発表要旨

共通論題①

「『結婚をめぐる生きづらさ』を『生きづらさ学』的に分析してみる―生きづらさ学における「評価モデル」確立の試み　―」

（司会）相原征代　（報告）相原征代、吉岡剛彦、大崎友記子、小川真紀、船越高樹

「生きづらさ学」とは、個人の責任とされやすい「生きづらさ」を「個人」「関係性」「しくみ」の3つの拡がりから捉え直し，そこで描かれた生きづらさの構造を縦軸（専門分野内での評価軸）だけでなく、他分野の研究を通じて「生きづらさ」を横断的総合的に分析し、領域（「横軸」）を超えた立体的な評価を可能にする学問を目指している。学際的な「生きづらさ」分析のためには「見える化」が必要であり、その評価モデルを作ることが「生きづらさ学」共同研究の今年度の目標となった。

今回の報告はその「評価モデル」を大学の授業で実践した時の報告と、各報告者が架空のモデルケースを「評価モデル」を使って分析するとどのような「領域の広がり」が明らかになるかを発表した。

授業プログラム実践報告―生きづらさ評価モデル確立の試み（相原征代）では、「自分自身の価値観が、他者に依存している」認識に至らなければ、生きづらさの問題構造の認識には至らず、「生きづらさ」の責任を関係性や社会へ「再配分」しようという目標には、モデル精緻が必要であるとした。

発達障害のある大学生の生きづらさから結婚に対する生きづらさを考える（船越高樹）では、発達障害を「個人の障害」とみなすのではなく、周りとの関係性との障害であるという視点に立ち、「関係性の問題」としての発達障害者支援という考え方が必要となってくるのではないか、と報告した。

「育児も仕事も一人でパンク寸前の私」ワンオペ育児の生きづらさ（吉岡剛彦）では、ワンオペ育児者の状況がとても個人では解決できない領域が多いことを報告し、生きづらさ学における①雑多性②連関性③学際性が、国際文化学と親縁性があるとの指摘があった。

互いの親の介護を抱える人の生きづらさ（大崎友記子）では、認知症という病気の治療や介護施設問題という切り離された解決法ではなく、生活にかかわる幅広い支援者を育成するべきであることを報告した。

災害による家族関係のぜい弱性の露呈に関する生きづらさ（小山真紀）では、原子力発電所の事故をめぐる生きづらさには、①移動と②原子力の脅威の解釈の違いに起因するものがあり、ずっと同じ場所に住み続けることを前提とした日本文化と、原子力の影響の解釈の違いがイデオロギー対立のようなものを生み出している状況、どちらも結果として避難者を苦しめる状況となる。これらの対立構造を緩和してこそ、持続可能な社会は可能になると報告した。

【相原征代（岐阜大学）】

共通論題②

「日米知的交流における戦前・戦後の断続」

（司会）高光佳絵　（報告）飯森明子、中嶋啓雄、高光佳絵

本セッションでは、戦前の日米交流に起源を持ちつつ、戦後に形を変えて続いた交流に焦点を当て、その断続を論じることをテーマとして、3名が報告を行った。

第1報告は、飯森明子（常磐大学）が日米協会会長などを歴任した実業家、小松隆を取り上げ、同氏が整理に尽力した『小松隆関係文書』を紹介しつつ、日米協会の戦前・戦後の断続を論じた。

第2報告は、中嶋啓雄（大阪大学）が高木八尺、松本重治ら日本のアメリカ研究者を中心とした日米交流を戦前におけるチャールズ・ビアードとの交流から、戦後の同夫人との交流に至るまで時系列的に論じ、第一次世界大戦後、原初的アメリカ研究コミュニティを形成した「新渡戸宗の使徒」が、アジア

第17回全国大会では共通論題が6セッション、自由論題が7セッション開催され、それぞれ活発な議論が展開されました。各セッションの司会を務められた方に要旨をご報告頂きましたのでここに紹介いたします。

・太平洋戦争を挟みながらも1960年代半ばまで一貫して日本における知的交流の中枢を担ったことを論証しようと試みた。

第3報告は、高光佳絵（千葉大学）が国際文化会館の中心的存在であった松本重治を取り上げ、彼が何をめざしたかを論じた。松本は、冷戦という環境を逆手にとってアメリカからの寛大な資金援助を得つつも一定の自律性を確保し、インドをアジア・太平洋における西洋への新たな対抗軸として注目し、日米交流に限定されない活動を行う中で第二トラックの孵卵器たろうとしたという仮説を提示した。

フロアからは、「連続性」よりも「断絶性」が強調されていたとの指摘があり、「連続性」として挙げられるのはどのような点かが問われ、各報告者よりそれぞれが対象とした人物の戦前の活動への認識などが紹介された。それぞれが利用した史料を相互に活用し合うなどして、このテーマをさらに深めていきたいと考えている。

【高光佳絵（千葉大学）】

共通論題③

「故郷を求めて・故郷を世界へ―近代台湾と日本・日本人―」

（司会）井竿富雄　（報告）邱函妮、吉永敦征、安渓遊地

本セッションでは、近代の台湾と日本・日本人とのかかわりについて、「陳澄波」（1895-1947）という画家と日本との関係を手がかりにして考えるところから始まった。

まず邱函妮（台湾・中央研究院）報告は、日本統治時代に台湾に持ち込まれた西洋近代美術や美術に関わる諸制度という角度から考察した。台湾総督府の手で創設された「台湾美術展覧会」（台展）を通じて、陳澄波は世界へ通ずる美術の制作に取り組んだ。また、陳のみならず在台湾日本人画家にも、宮崎出身の塩月桃甫（1886-1954）が台展出品作品「母子」で霧社事件（1930年）を扱ったように既存制度の内側から植民地統治を撃つ事例があることが示された。

次の吉永敦征（山口県立大学）報告は、陳澄波が残した日本語ノートや断片、哲学書への書きこみから、陳澄波の美術思想が学生時代の教育で受けた「美のイデアの具現化」から変化していく過程を示唆した。

第三の安渓遊地（山口県立大学）報告は、一転して「台湾に生きた日本人」の視点から台湾を考察した。植民地統治終了後も台湾に留め置かれた日本人学者たちの作った『回覧雑誌』の記事や、幼少時から台湾に生まれ育った人類学者國分直一（1908-2005）が残した2・28事件に関する同時代記録としてのフィールド・ノートを読むことで、残された史料が権力の検閲やこれを前提にした忖度による自己規制を免れないことが明らかにされた。

近年、日本において台湾に関する関心は政治動向もあり増大している。ただ、日本の植民地統治から国民党政権へと続く政治的な困難のなかで、そこに生きる人々がいかにして自身の考えを表現し、時代と対峙したかについては、今後の探求が必要であることが議論の中で明らかになった。

【文責　井竿富雄（山口県立大学）】

共通論題④

「国」を意識するとき――文化的越境性から考える伝統、民族、経済――

（司会）高橋梓　（報告）岡野薫、朝立康太郎、高橋梓、李敬淑

本セッションはグローバリゼーションとローカリゼーションが対立を見せる過去の様々な事例に焦点を当て、個人の「国」の意識と異文化受容がいかなる関係にあるかを考察するものである。

第一報告では岡野薫が、「鎖国」をめぐる18世紀ドイツ語圏の議論、なかでも、その中心に位置するエンゲルベルト・ケンプファーの「鎖国論」を取り上げた。この中で彼は「鎖国」を肯定する。それをふまえて本報告では、ケンプファーの〈閉ざされた世界〉への称賛の背後に、彼の異文化に対する〈開かれた〉姿勢があったことを論じた。

第二報告では朝立康太郎が、19世紀半ばのアメリカ合衆国南部で言論活動を行ったジョージ・フィッツヒューに注目し、彼の南部社会擁護論が論理的な整合性を求めるほどに、単純な北部批判から離れ、社会主義的なユートピア論に落着していくことを論じた。

第三報告では高橋梓が堀辰雄とマルセル・プルーストのテクストを比較し、日本の仏教とフランスのキリスト教を眺める二者の視点の中に共通点を探ることを試みた。両作家がともに宗教芸術の中に個人的な記憶を育む場としての機能を見出していることを根拠として、各国の個別文化の中に普遍的な文化要素が潜んでいる可能性が示されることとなった。

第四報告では李敬淑が、戦時下の植民地朝鮮における李香蘭表象の受容に注目し、彼女が朝鮮人観客にいかなる論理で「民族」として想像され（てしまっ）たかについて論じた。大東亜共栄圏構想において各植民地地域にグローバリゼーションへの変換が強要されたにもかかわらず、そこで発信される文化を民族性と結びつけ、ローカルな共同体意識を確認するものとして消費しようとした個の動きを浮き彫りにすることとなった。

本セッションの報告者はいずれも人文学的手法からのアプローチを選択した。我々は今後もこの試みを続け、国際文化学に新たな方法論を確立することを目指していきたい。

【高橋梓（近畿大学）】

共通論題⑤

地域社会から見た「2020年」の越え方――ジェンダー・地方分権・オリンピック

（司会）梅津顕一郎　（報告）四方由美、有馬晋作、梅津顕一郎

現在日本国内においては、東京オリンピックが開催される「2020年」を一つの目標に、様々な形での「社会改善」が「国を挙げて」図られているが、世界的ハイ・モダニティ化のもとで、かつての「総力戦体制」も終焉へと向かいつつある現状では、オリンピックも含めたこれらの動きは、むしろ古い時代の国家主義的発想の内に留まるものなのではないか――こうした共通認識を出発点に、「地域社会」というフィールドを通して提起できる問題について3人の発表者が発表し、その後2020年の越え方についてフロアーも交えディスカッションを行った。

第一報告の有馬氏は、行政学の立場から現在における地方分権の難しさの理由として、近代的税制の整備が、結果として地域コミュニティの紐帯を解体し、中央政府と個人とを直接結び付ける意識構造の形成に寄与した点を指摘した。また第二報告者の四方氏は、女性の社会参加促進策の実情を紹介し、「女性の活躍」という概念自体が総力戦体制的な国家単位での社会分業体系に回収され、新たなる性的役割分業の再編に寄与しうる可能性を指摘した。

さらに第三報告者の梅津は、オリンピック報道の分析から、国民のメンタリティレベルにおいては、かつての「総力戦体制」的な重厚なものに代わって、ライトな「仲間感覚」を消費するナショナリズムが形成されている点を指摘した。

討論では、時間的制限もあったものの、フロアーを中心に様々な指摘・ご意見をいただいた。中でも馬場会員からの「国家的なものが担っていた役割を、単純に個人もしくは個別セクションにゆだねるという発想は危険である」とのご指摘は、中央集権からの自立なる発想が、ともすると全てを個に還元し、社会全体（公共性）の議論を捨象しかねない危険性を指摘する、貴重なご意見であった。

【梅津顕一郎（宮崎公立大学）】

共通論題⑥

「国際文化学の視点から考えるグローバル人材育成の新たな方法論」

（司会）斉藤理　（報告）斉藤理、加藤恵美、菅野敦志、岩野雅子

国際文化学らしいグローバル人材育成プログラムとは何か。語学教育や留学促進に偏重しがちなわが国の同人材育成の課題点を批判的に検証しつつ、今後の方法論を探るため、順に4つの報告を行った。

1.　世界と地域の繋ぎ手になる「媒介」探しを行う演習事例として、「イシューマップ」、「プロトタイピング」など、学習過程の可視化を重視した「自主ゼミ」演習の効果、課題等について（斉藤理（山口県立大学））。

2.　国内の異文化圏といえる朝鮮学校の実情を紹介するとともに、同校を調査対象とした演習の方法論ならびに予想される学習効果について（加藤恵美（早稲田大学））。

3.　地域間・文化間を跨ぐ試みとしての「東アジア海外実習」実践の意義と課題について、とりわけ「非国家」の視点から世界各地域の文化的複雑性を理解させる工夫について（菅野敦志（名桜大学））。

4. ロシア圏から欧米圏へと歴史的変換を遂げつつあって、2007年からロシア語、英語、そしてカザフ語の三言語政策を進めるカザフスタンにおける文化理解教育について（岩野雅子（山口県立大学））。

本パネルを通じ、1)　朝鮮学校や、本土とは異なる文化性を宿す島嶼部での研修など、文化のダイナミズムに直接的に触れることの教育効果を再確認でき、2）そうした体験を通して、何か「モヤモヤ感（加藤）」が残りつつも理解し合う寛容さを習得することこそが、国際文化学を軸としたグローバル人材養成の基盤となるのではないだろうか。3）一方で、カザフスタンの発展戦略に見られるように、穏やかならざるグローバル化の潮流のなかで自文化を継承していくためには、ある種の確固たる政策的支援体制が欠かせないこと。以上のような点を共有できるセッションとなった。

また会場からは、高度な語学力や世界情勢を熟知したいわゆるグローバル・ビジネスマン型とでもいうべき人材への期待が大きい中、文化を軸とした同人材養成にどれほどのコンセンサスが得られるのか、という重要な指摘があり、今後、具体的な結果を見せていくことで説得力を持ち得ることを確認し、本セッションを終了した。

【斉藤理（山口県立大学）】

パネルディスカッションの様子

第16回全国大会 **公開シンポジウム**

＜1940年＞を起点に考える＜2020年＞の越え方

基調講演　ケネス　ルオフ
（ポートランド州立大学教授）
「宮崎、日本、アジア大陸――1940年と2020年」

パネル・ディスカッション
パネリスト：ケネス　ルオフ
乗松 優（関東学院大学兼任講師）
「ボクシング東洋選手権と未完のプロジェクトとしての『帝国日本』」
渡邊 英理（静岡大学准教授）
「宮崎の沖縄奄美タウン、波島と公共性」
討論者：　若林 一平（文教大学名誉教授）
司会：　倉 真一（宮崎公立大学准教授）

自由論題A

メディアと想像の共同体の現在・過去・未来

（司会）齋川貴嗣　（報告）目黒志帆美、中川拓哉、白石さや

本セッションでは、「メディアと想像の共同体の現在・過去・未来」と題して、3つの報告が行われた。

第1報告は、目黒志帆美会員（東北大学）「ハワイ王国で醸成されるアメリカ人の『自国認識』―マーク・トウェインの『ハワイ通信』を中心に」であり、トウェインの『ハワイ通信』の分析を通して、19世紀後半のアメリカ人のハワイ観、さらにはアメリカ自国認識の一端が明らかにされた。また、『ハワイ通信』を紀行文としてではなく一つの文学作品として読むことで、作品に内在する歴史的虚実をトウェインのアメリカ人に向けた主体的な自国認識構築過程として理解する視点が提示された。

第2報告は、中川拓哉会員（名古屋大学）「輸出される日本―1930年代後半の『国際映画』をめぐる問題」であり、1930年代後半に日独合作で制作された「国際映画」を中心に、対外的な文化発信における「日本的なるもの」の問題が検討された。そして、「国際映画」への批判と興行的な挫折の背景には、対外的に理解しやすい「日本」像と国内的な「日本」像との齟齬があったことが指摘された。

第3報告は、白石さや会員（岡崎女子大学）「THE RIGHT　START：コンピュータ世代の未来観と幼児教育論」であり、サンフランシスコ・シリコンバレーにおける情報コミュニケーション技術（ICT）世代の未来観と幼児教育論について、最新のフィールドワークを踏まえた報告が行われた。特に、大手ICT企業に勤め、facebookなどを駆使する人々が、自らの幼児教育においては教師との人間的交流、文化や人間の多様性、言語の重要性、東洋的文化伝統など心の問題に強い関心を寄せていることが明らかにされた。

以上3報告は時代と場所は異なるが、いずれも文化とアイデンティティに関わる問題を扱っており、またそこにおけるメディア（文学、映画、ICT）の作用に注目する点で共通性が見られ、メディアと想像の共同体の歴史的・現代的意義を考える上で非常に示唆に富む内容であった。

【齋川貴嗣（高崎経済大学）】

自由論題B

グローバル化のなかのツーリズムとメディアイベント

（司会）加藤恵美　（報告）中村幸子、坂口可奈、瀬川澄佳

本セッションでは、発表予定であった中村幸子会員が残念ながら欠席されたため、次の２つの発表が行われた。

第一報告「シンガポールのネイション・ブランディング」（坂口可奈会員）では、シンガポールの国民建設の特徴が、同国の観光政策の検討の結果として示された。具体的には、外の目を意識した「ネイション・ブランディング」が、実は国民建設と密接に絡んでいること、またシンガポールの「ネイション・ブランディング」が、隣国の特にマレーシアを意識したものであったことが指摘された。

第二報告「ロンドン・オリンピック開会式：パブリック・ディプロマシーの可能性」（瀬川澄佳会員）では、同開会式における「芸術プログラム」には、パブリック・ディプロマシーでありながらも国内的なインパクトがあったことが論じられ、タイトルにある通りの「パブリック・ディプロマシー」の可能性が指摘された。瀬川会員によれば、「芸術プログラム」の「多様性アピール」は、国内の反発を招いた。

第一報告に対しては、「ネイション・ブランディング」研究は、他の政策領域を対象にしても可能であり、例えば外国人労働者政策に関わる国内居住の

全国大会にて第7回平野健一郎賞表彰式が行われました。

受賞者　斉藤理氏（山口県立大学国際文化学部文化創造学科教授）

「行動論的アプローチから観光まちづくりを考える
ー新たな「動詞抽出調査法」の提案を中心に」

（日本国際文化学会年報『インターカルチュラル』第15号所収）

外国人の人権状況も、「ネイション・ブランディング」を左右するのではないかというコメントがあった。第二報告に対しては、政府によるいかなる「ナショナル・アイデンティティ」のアピールも、それが「多様性」であれ「単一性」であれ、国内の反発を招きうるのではないか、という疑問が呈された。

報告とその後の質疑応答を通じて、「ネイション・ブランディング」も「パブリック・ディプロマシー」も、文化を利用して国民建設を成し遂げようとする政府の行動である、というより深い気づきを得られることができた。そのような国民建設に対する、人びとの側の違和感が指摘されたことも重要であった。このように本セッションは、示唆に富む意義深いセッションであった。

【加藤恵美（早稲田大学）】

自由論題C

植民地主義と東アジア世界

（司会）山脇千賀子　（報告）照屋理、菅野敦志、崔紗華、大和裕美子

本セッションでは、東アジア世界で展開した植民地主義に関わる４つの発表があった。

第一報告は、照屋理会員による「日本統治期台湾における沖縄県系人の諸相―『台湾日日新報』記事を手掛かりにして―」という題目での、日治時代台湾で発行された日本語による新聞に掲載された記事から、沖縄県系人が従事した職業、台湾に渡った来歴などについて紹介する発表だった。

第二報告は、菅野敦志会員が「沖縄と台湾における戦後の「方言札」―米軍政下と国民党統治下の比較―」という題目で発表した。日本統治期を経て、1945年以降は米軍政下と国民党統治下に置かれた戦後の台湾と沖縄の両地域で使用された「方言札」（中国語では「国語札」）の共通性に着目した比較検討が行われた。

第三報告は、崔紗華会員による「朝鮮人学校の再編―1950年代『雪どけ』を背景に―」という題目での、グローバル・ヒストリーの視点から、日本における朝鮮人学校、総連、共和国政府の紐帯が築かれた過程を分析する発表がされた。第四報告は、大和裕美子会員による「日帝強制動員歴史館にみる日本人市民の記憶運動」という題目での発表だった。2015年12月に釜山にオープンした日本統治期の歴史を記憶にとどめるための記念館に調査協力者としての日本人運動家が展示された経緯が、歴史館の設立趣旨・経緯・展示内容の分析とともに検討された。

いずれの報告も、短い発表時間では紹介しきれない豊富な史料・資料に基づく研究の一端を紹介するもので、限られたセッションの時間内では十分な質疑応答・議論を展開することが残念ながらできなかった。それぞれの発表において提示された今後の研究課題に基づいて、会員諸氏の間で研究テーマをさらに深化させる議論の機会が設けられることが期待される。

【山脇千賀子（文教大学）】

自由論題D

国際主義と人道主義

（司会）萩原稔　（報告）山内晴子、メスロピャン メリネ、鈴村裕輔、小阪裕城

本セッションでは、国際主義と人道主義というテーマにかかわる４つの報告がなされた。

まず、山内晴子会員（朝河貫一研究会理事）は、イェール大学歴史学教授として国際的に活躍した朝河貫一（1873-1948）について、その「文化的国際主義」者としての側面を示す活動の１つとして、朝河の呼びかけに応じて実現された「日本イェール協会コレクション」の発端と経緯を紹介した。

メスロピャン・メリネ会員（東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程）は、第一次世界大戦中から大戦後にかけて、オスマン＝トルコ帝国の迫害を逃れて日本に亡命したアルメニア人難民の救済に関し、当時日本に居住していたアルメニア人女性のディアナ・アプカー（1859-1937。大会プログラムでは「ダイアナ・アプカー」となっている）の果たした役割を検討した。

鈴村裕輔会員（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）は、戦前・戦中の日本を代表する経済専門雑誌である『東洋経済新報』について、編集主幹の石橋湛山（1884-1973）の政治的立場を紹介しつつ、英語版のThe Oriental Economist（1934年創刊）、朝鮮半島における『大陸東洋経済新報』（1943年創刊）、および『香港東洋経済新報』（1944年創刊）のそれぞれの創刊の背景について報告した。

小阪裕城会員（長野県短期大学助教）は、1948年に国連総会で採択された世界人権宣言の起草過程における、国際機構への請願権をめぐる各国の動きについて考察したうえで、従来の「拘束力のない宣言→拘束力を有する規約（条約）」などの定番の構図にとらわれず、多様な可能性を模索することの意義を論じた。

自由論題でありながらも、全体のテーマに合致する、共通した問題関心を見いだすことができるセッションであった。聴衆からも少なからぬ質問が寄せられ、活発な議論が展開された。

【萩原稔（大東文化大学）】

自由論題E

海の境界と越境が生み出す社会

（司会）上原良子　(報告)天野尚樹、花松泰倫、吉川純恵

自由論題Eでは「海の境界と越境が生み出す社会」と題して、天野尚樹「ボーダーとしての宗谷海峡：「くにざかい」から「国境」へ」、花松泰倫「対馬・釜山ボーダーツーリズムの展開と境界社会の変容過程」、吉川純恵「中国の海洋経済政策と地方政府」の3本の報告を行った。

天野報告は、宗谷海峡における貿易および人の移動の分析を通じて、関係の低迷と歴史的なボーダーの変容を明らかにした。今日では関係強化を求める稚内に対し、北東アジアを視野に入れ広域への関心を示すサハリン島とはビジョンが大きく異なり、心理的な距離の大きさが指摘された。花松報告では、国境地帯の離島である対馬において韓国との交流に力を注ぎ、島経済の活性化に成功した一方で、住民の心理レベルでは接触の機会を増えるとともに、反発等の摩擦も強まっていることが明らかにされた。こうした対馬の社会内部において「脱領域化」と「再境界化」が同時並行する状況を分析し、新たな国境観が生まれていることが分析された。吉川報告では、2014年に中国政府により発表された「一帯一路」構想について、重慶市と広東省という地方政府に焦点をあて、経済成長の立体的な構図を明らかにした。従来は中央の視点から分析されてきた「一帯一路」構想において、地方政府の役割の重要性、とりわけ沿海部では「海洋」が新たな発展軸と目されていることが分析された。

議論では、人の交流の高まりへの支援状況等、また「一帯一路」における地方政府の温度差（特に東北三省）、また日本人の意識の砦、閉鎖性についての指摘・質問があり、議論が交わされた。今回の三報告を通じて改めて海の境界の重要性とダイナミックな変容を認識することができた。

【上原良子（フェリス女学院大学）】

自由論題F

国際文化研究とナショナリズムへの視座

（司会）川村陶子　（報告）葉柳和則、半田幸子、馬場孝、大形利之

本セッションでは、ナショナリズムを幅広い関係的な視点から検討する４つの報告が行われた。

第１報告「テクストとしての文化教書（1938）―ナチス時代のスイスにおける『精神的国土防衛』運動の理路―」（葉柳和則会員）と第２報告「ナチスドイツ侵攻前後のチェコにおけるミレナ・イェセンスカーの民族観―ナショナリズムとナチズムへの抵抗に焦点を当てて―」（半田幸子会員）は、ドイツの侵略的拡張に対する隣国での対抗の諸相を、保守系政権の教書と在野女性ジャーナリストの言論という対照的な事例の分析を通して描き出した。

両事例は、1930年代末という時期や文化的に多様な国民構成では共通しており、質疑では各言説の形成背景や内容、具体的には言語と民族の関係などについて討論が行われた。

第３報告「アーネスト・ゲルナーの思想・哲学――その『全体像』と国際文化研究への含意」（馬場孝会員）は、ゲルナーの多岐にわたる研究の中でこれまで注目されなかった精神分析分野の著作を分析考察した。討論では、ゲルナーの研究の具体的内容について、その批判対象や、フランスの社会人類学との関連などについて検討がなされた。

第４報告「IS（イスラミック・ステート）とインドネシアでのテロ行動への影響に関する一考察」（大形利之会員）は、昨年の全国大会での報告に続き、インドネシアの過激派リーダー、とりわけシリアに渡った若い「戦士」たちの思想や活動、テロのスタイルの変化を、最新情報をもとに明らかにした。フロアーとのやりとりでは、テロリストの資金調達方法や教育程度はどうか、ネットで恨みを「同期」させる個人のネットワークはネイションといえるかなどに関して議論が行われた。

４つの報告はいずれも未開拓のテーマを扱う意欲的かつ誠実なものであり、セッションは全体としてナショナリズムを新たな視座から検討する有意義な機会となった。

【川村陶子（成蹊大学教授）】

自由論題G

民衆の生活世界とNPO

（司会）牧田東一　（報告）田中佑実、井出晃憲、秋保さやか

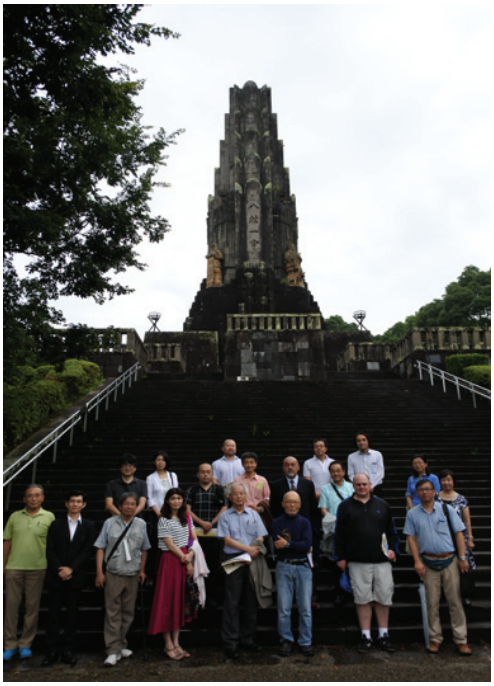
田中佑美（佐賀大学大学院生）は「フィンランドのキャスパイッカKäspaikka－樹木のモチーフに聖樹の面影を見る」と題して、キャスパイッカと呼ばれる伝統的タオルに未婚女性によってフィンランドの神話的聖樹のモチーフが刺繍されことから、それを家族との思い出として実家に残すもの、「形見」と解釈し、そこには家族の「面影」が託されるとした。そして、聖樹に見られる人と樹木の生命的な繋がりが、フンランドの国是である文化の多様性の概念に影響すると分析した。

第二報告では、井出晃憲（文教大学湘南総合研究所）が「住民とNPOの協同的実践によって文化を紡ぐ～企画展『岩に刻まれた古代美術アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン』の成功まで」と題して、日本のNPOによるアムール河周辺少数民族のソ連崩壊後の経済危機への支援がことごとく失敗する中で、住民自らが企画に参加した古代文化遺産の岩絵の民族学博物館での展覧会が、観光開発等によって新たな可能性に繋がったことを報告した。

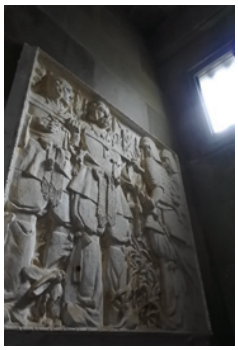
第三報告では、秋保さやか（筑波大学）は「自律と依存の狭間で生きるクメール農民―カンボジア農村における支援の場に着目して―」と題する報告で、大成功したとされるカンボジア人指導者のNGOによる参加型の開発事業が住民とのトラブルによって瓦解した事例に、NGOと住民が参加型の理念とは対照的なパトロン・クライアント関係を現実には構築してしまっていたと分析した。

討議では研究手法に関する質問などが出されたが、筆者は、この自由論題が扱う周辺的世界に生きる人々の文化を扱う場合に、研究者自身がある種の権力的地位にあることへの自覚と、そうした立場から一定の解釈（例えば、「形見」「面影」「企画展の成功」「プロジェクトの失敗」）を行うことの危険性、また研究者が何をもって「良い」とするのかを明示する必要性を感じた。

全国大会（宮崎）エクスカージョンに参加して



普段は見ることができない「平和の塔」内部の見学



大国主命が天照大神の命に従い国を譲る「国土奉還」のレリーフ

全国大会前日の7月7日（金）、九州北部を襲った集中豪雨の影響を懸念しつつも、羽田を離陸した飛行機は無事宮崎空港に到着。エクスカージョンに参加される先生方と合流し、宮崎公立大学を経由したバスは宮崎平和台公園へ。雨に悩まされることもなく、参加者17名は大いにエクスカージョンを楽しむことが出来ました。

「平和の塔」は「皇紀2600年」にあたる昭和15（1940）年に建立。神具の「御幣」をモデルに設計され、塔の正面には「八紘一宇」の文字が刻まれています。塔の周囲には四神像が鎮座、使われている石材は台湾・朝鮮など当時の日本の支配下にあった地域、及び「満洲国」「中華民国（南京政府）」といった日本の「友好諸国」から寄贈された「献石」。「『八紘一宇』の塔を考える会」の皆様の詳細な解説を受けつつ、参加者は中国各地の地名が刻まれた石を見つけ、その由来を想像しました。

今回のエクスカージョンでは、普段見ることができない平和の塔内部を特別に見学させて頂きました。特に「大東亜の図」「国土奉還」「天孫降臨」など8枚のレリーフは、当時の日本の世界観を圧倒的な迫力で今に伝えていました。

次に向かったのは沖縄・奄美タウン「波島」。戦前より様々な理由で故郷を離れて宮崎に移り住んだ人達が住む集落です。彼らの移住の理由や宮崎における生活、そして地域との関係など、議論は尽きることがありませんでした。

宮崎という地域が持つ歴史と文化に触れる素晴らしいエクスカージョンを企画し、さらには当日の案内も務めて頂きました宮崎公立大学の倉真一先生、梅津顕一郎先生、四方由美先生に、心より感謝申し上げます。

【事務局　藤田賀久（多摩大学）】

学会事務局より

今回の全国大会は宮崎市の宮崎公立大学で開催されました。台風の影響で飛行機の便変更などの困難も生じましたが、全国から多くの会員の皆様が集まり、無事に終了することができました。実行委員長をお務め下さった倉真一先生をはじめ、宮崎公立大学の皆様に心からお礼申し上げます。

また、大会では多くの会員の皆様に総会へご出席頂き、お蔭様で常任理事会で熱心に検討された諸議案や山口県立大学から多摩大学への事務局移転が正式に承認されました。これからもよろしくお願い申し上げます。

【事務局　大場、西井、藤田（多摩大学）】

年会費納入のお願い

機関誌刊行や会の運営に支障をきたしますので、2017年度の会費を未納の方は速やかにお振込をお願い致します。

ゆうちょ銀行
００２１０－２－１３８４０８
日本国際文化学会